

Hem21 NEWS

財団法人
ひょうご震災記念21世紀研究機構
ニュース

「Hem21」は、ひょうご震災記念21世紀研究機構の英語表記である
Hyogo Earthquake Memorial 21st Century Research Instituteの略称です。

VOL. **19** 平成22年 1月
(2010)

CONTENTS

- 1 ▶ 21世紀文明シンポジウム
「長寿国につぼん活性化を語る」
- 2 ▶ 機構外部評価結果の概要
- 3 ▶ こころのケアシンポジウム
「災害と地域支援」
- 4~7 ▶ 人と防災未来センターニュース
MiRAi
- 8 ▶ 情報ひろば

21 世紀文明シンポジウム 「長寿国につぼん活性化を語る」を開催

21世紀の諸課題について県民・行政関係者等が一堂に会し、幅広い観点で議論を深めることを目的とした、21世紀文明シンポジウムを昨年11月26日にクラウンプラザ神戸で開催しました。

「長寿国につぼん活性化を語る」をテーマに約200人が参加。日本是世界トップの長寿国でありながら、若年者・高齢者の将来不安や格差問題、展望の見えない産業界など社会全体が言いようのない不安に包まれています。今回のシンポジウムでは、このような不安から脱却し、新しい日本型福祉社会への展望を開くためにはどうすべきかについて、学識者を交えて議論を深めました。



貝原理事長

開催に当たって、当機構の野々山久也研究統括があいさつに立ち、「長寿社会を生きる私たちにとって、団塊の世代が75歳に到達する2025年までに新しいビジョンを出さなければならない」と開催趣旨を説明しました。

続いて、「長寿国につぼん活性化に向けて」と題して、当機構貝原俊民理事長による基調提案を行いました。貝原理事長は、震災復興時の神戸と現在の日本の状況を重ね合わせ、日本のレジーム転換の必要性を述べた後、国民の意識が必ずしも小さな政府ではなく、高福祉高負担でも構わない人が多くなってきている状況から、「政治がいかに国民が納得するような日本型福祉社会のビジョンを提示できるか。そのためには福祉・医療・教育産業を具体的にどのような仕組みとして制度設計していくかが課題である」としました。

後半のパネルディスカッションでは、山口二郎氏が「政治学」の立場からリスクを国民全体が負担する社会への転換を、林敏彦研究統括が「経済学」の立場から社会保障の充実が高成長につながることを、そして、神原文子氏が「社会学」の立場から同世代内での育ち合いのシステムの創設が必要なることを述べられ、少子高齢化を迎える日本にとってあるべき日本型福祉社会のモデルについて議論がなされました。

(当日の内容については、小冊子を作成しております。ご希望の方は、電話、FAXで当機構学術交流センターあてにお申し込みください。無料。)

基調講演者

貝原 俊民 ((財)ひょうご震災記念21世紀研究機構理事長)

コーディネーター

野々山久也

(甲南大学文学部教授、(財)ひょうご震災記念21世紀研究機構研究統括)

パネリスト

林 敏彦

(放送大学教授、(財)ひょうご震災記念21世紀研究機構研究統括)

山口 二郎 (北海道大学大学院法学研究科教授)

神原 文子 (神戸学院大学人文学部人文学科教授)



パネルディスカッションの様子

管理部

研究調査本部

人と防災未来センター

こころのケアセンター

学術交流センター

機構外部評価結果の概要

当機構では、財団の設立目的に沿って、調査研究や各種事業に効果的かつ効率的に取り組み、社会的責任を果たすべく、平成21年度の外部評価を実施しました。

今年度の外部評価では、組織の大幅な見直しが行われた最初の年度である平成20年度に取り組んだ事業・研究の内容、各組織の機能等について、平成21年7月から12月にかけて、機構内部で実施した自己点検評価の結果をもとに、各委員による評価結果を全体会議に付し、項目ごとに厳正な評価をいただいたところです。

報告書の概要は以下のとおりですが、報告書の全文は、当機構のホームページに掲載しています。

機構全体の評価

「『人と防災未来センター』及び『こころのケアセンター』の運営も含め、全体として、阪神・淡路大震災という歴史的経験とそこから得られた教訓をもとに中期計画に沿って概ね所定の成果をあげており、今後さらなる発展が期待される組織である」との評価をいただきました。

あわせて、次の項目について、貴重なご意見をいただきました。

機構運営のあり方

- ・機構のミッションの明確化について
- ・事業実施と情報発信の配分について
- ・震災に特化した取り組みへの重点化について

機構が担う機能の発揮のあり方

- ・組織内外との連携について

研究のあり方

- ・情報提供の強化について
- ・オリジナリティのある研究の取り組みについて

組織・体制のあり方

- ・研究部門のあり方について
- ・出向職員のスキルや経験の活用について

事業のあり方

- ・PRの方策について

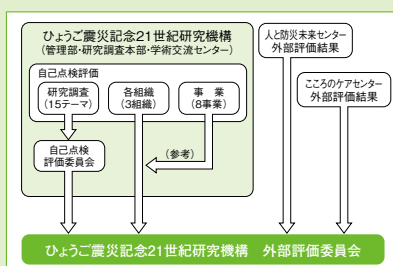
その他の事項

- ・事業及びミッションの根本的な見直しについて

研究調査の評価

平成20年度に完了した15テーマの研究調査については、1テーマに1名の学識経験者を専門委員として委嘱し、査読を行い、評価していただいたところ、次の項目に関して共通した指摘をいただきました。

- ・研究調査の進め方と議論の展開に関する指摘
- ・調査方法に関する指摘
- ・報告書の体裁に関する指摘
- ・提言に関する指摘



外部評価委員名簿

- 委員長** 新野幸次郎
財団法人神戸都市問題研究所理事長
- 委員** 足立 幸男
関西大学政策創造学部教授
- 渥美 公秀
大阪大学大学院人間科学研究科准教授
- 天野 明弘
元 兵庫県立大学副学長
- 木村 陽子
総務省地方財政審議会委員
- 佐藤友美子
サントリー文化財団上席研究フェロー
- 瀧川 博司
兵庫県商工会議所連合会特別顧問
- 泊 次郎
東京大学地震研究所研究生
(元 朝日新聞社編集委員)

こころのケアシンポジウム「災害と地域支援」を開催

「災害と地域支援」における こころのケアのあり方を探る

兵庫県こころのケアセンターの日ごろの研究成果の紹介と災害時における「こころのケア」について、地域支援活動を通して見えてきた新たな課題とその取り組みを考えるシンポジウムを、昨年の11月12日に同センターで開催しました。センター開設以来毎年実施しているもので、今年で6回目になります。研究報告とパネルディスカッションに、自治体職員や保健・福祉関係業務従事者、学校関係者など約170人が参加しました。



シンポジウムの様子

開会に当たり、当機構の山口直彦副理事長兼兵庫県こころのケアセンター長が「阪神・淡路大震災を経験し、そこから得た教訓を発信し、今後も引き続き支援、協力をしていきたい」と述べました。また、久保修一兵庫県健康福祉部長は「震災15年目を迎える節目とし、震災の経験と教訓を風化させないため、災害文化のさらなる定着と防災減災対策の一層の推進に努めている」と訴えました。

続いて、主任研究員3人が研究内容について報告を行った後、富永良喜兵庫教育大学大学院教授をコーディネーターに、「災害と地域支援」をテーマにパネルディスカッションを行いました。

県立舞子高校環境防災科長の諏訪清二教諭は、同校の生徒がボランティア活動を通して被災地の方々とどうかかわっているか紹介し、「被災者と笑いながら一緒に仕事をするなどを通じて、何らかのこころのケアになればうれしい」と思いを語りました。

国立精神・神経センター精神保健研究所の鈴木友理子

室長は、「不況、経済的な困難など災害以外で精神的な健康に影響を受けるケースがあり、長期的で幅広い支援が必要である」とし、兵庫県こころのケアセンター加藤寛副センター長は、「災害医療は事前に準備されているが、こころのケアについては想定されていない。活動全体をマネージメントする体制の強化が求められる」と指摘しました。

最後に富永氏は「ボランティアによるこころのケアと専門家によるこころのケアがあり、この二つを協議すれば、被災者によりよいプログラムが提供できるのでは」と提言しました。

コーディネーター

富永 良喜（兵庫教育大学大学院教授）

パネリスト

諏訪 清二（兵庫県立舞子高等学校環境防災科長・教諭）

鈴木友理子（国立精神・神経センター精神保健研究所室長）

加藤 寛（兵庫県こころのケアセンター副センター長）

HAT神戸 掲示板

兵庫県立美術館

2009年度コレクション展Ⅲ

「コレクション名品選」

「小企画 山本六三展—幻想とエロス」

代表的な所蔵作品を紹介するとともに、阪神・淡路大震災15周年に当たることから震災をテーマとした作品を特別に展示。また、同時開催の小企画にちなんで、戦後の具象絵画や神戸画壇、幻想的なモチーフを描いた海外の版画作品などを集成的に展示しています。

■会期＝2010（平成22）年3月14日（日）まで

■観覧料＝一般500（400）円、大高生400（320）円、中小生250（200）円
※（ ）は20人以上の団体割引料金

●休館日＝月曜（祝日の場合は翌日）

●開館時間＝10時～18時（特別展開催中の金曜・土曜は20時まで）

※入場は閉館の30分前まで

TEL 078-262-0901

<http://www.artm.pref.hyogo.jp/>



山本六三「イカロスの夢」1989年 個人蔵

JICA兵庫

JICA兵庫/国際防災研修センターは、阪神・淡路大震災15周年を迎える2010年1月を「防災月間」と位置づけ、イベントやセミナーを実施しています。

イザカエル「大」キャラバン! in JICA兵庫 <http://kaerulab.exblog.jp/>

楽しみながら学ぶ新しい形の防災訓練。子どもたちはゲーム感覚あふれる防災訓練に参加し、ポイントをゲットしておもちゃと交換することができます。家で眠っているおもちゃを持って参加してください!

■開催日＝1月31日（日）

■場所＝JICA兵庫2階講堂・南側国際交流広場

☆アクセスは <http://www.jica.go.jp/hyogo/office/access.html>

☆イベントの詳細は <http://www.jica.go.jp/hyogo/event/index.html>

◆食堂のご案内

1階の食堂（カフェテリア方式）は、どなたでも利用できます。イスラム教徒のためのハラール食のほか、日替りの和食なども用意しています。大好評の月替わりエスニック料理「昼・夜のみ、700円、ドリンク付き」は、1月は兵庫県の減災月間とJICA兵庫防災イベントにちなんで「世界の保存食メニュー」、2月はトルコにおける日本年にちなんで「トルコ料理」です。

☆メニューの詳細と写真は

<http://www.jica.go.jp/hyogo/office/restaurant/index.html>

■営業時間＝昼 11時30分～14時、夜 17時30分～21時

※各終了30分前ラストオーダー

◆広報展示室のご案内

JICA事業紹介に始まり、そこから見える世界の文化や諸問題をテーマにパネルや映像を展示しています。その他にも国際協力に関するさまざまな「見て、触って、体験できる」展示がいっぱい。2、3月は「アラブ世界」をテーマに民族衣装や文化紹介について展示します。

【その他主要展示物のご案内】

▶世界で活躍する兵庫県出身のJICAボランティア ▶兵庫で学ぶ研修員の紹介 ▶市民参加メニューあれこれ

■開室時間＝11時～18時

●問い合わせ

JICAプラザ兵庫

TEL 078-261-0341 Eメール jicahic-plaza@jica.go.jp

<http://www.jica.go.jp/hyogo/office/plaza.html>

「資料が語る阪神・淡路大震災の記録と現在」を開催



講演会の様子

11月28日、神戸大学附属図書館と人と防災未来センターとの共催で開催している合同資料展の一環として、講演会「資料が語る阪神・淡路大震災の記録と現在」を人と防災未来センターで開催しました。岩崎信彦神戸大学名誉教授と佐々木和子神戸大学地域連携推進室研究員が、震災後に収集された資料の意義や記憶の継承について講演し、約50人の参加者が聴き入りました。

「過去を受け止め、未来に生きる —震災資料の収集・保存の意義を考えながら—

岩崎信彦神戸大学名誉教授

阪神・淡路大震災直後から避難所調査(灘区)や鷹取東復興支援などの活動を行い、現在では「震災障害者」問題にも取り組んでいる岩崎氏は、それらのエピソードを交えつつ、「大震災は一つの地震だが、出来事は人それぞれに無数にある」と指摘しました。「震災障害者の交流会」などの事例を紹介し、そうした活動に参加した人々が多様な震災体験を共有していったと話しました。また、被災体験を持たない人々にいかに伝えるかについては、広島原爆資料館を例にあげ、原爆の恐ろしさを伝える同資料館の資料に来館者が共感し、さらに世界に「ノーモア・ヒロシマ」という祈りが広がったと指摘。阪神・淡路

大震災の被災地でもさまざまな形で震災体験の共有と記憶の継承が行われてきたことを紹介し、その活動が地域社会の歴史を形成しながら、さらには減災活動につながっていると述べました。こうした市民による共同の活動は、「時間の流れ=過去」を生み出すことであり、「未来」への歩みであると締めくくりました。



岩崎信彦氏

「震災資料が生まれる —震災資料収集・保存の現場から—

佐々木和子神戸大学地域連携推進室研究員

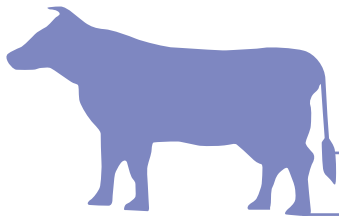


佐々木和子氏

(財)阪神・淡路大震災記念協会の嘱託として震災資料の調査収集や整理の現場に携わってきた佐々木氏は、「震災体験を継承したい」という意識が地震発生直後から幅広く存在した」と述べ、市民の中で同時代史の記録(現代資料)の保存活動が展開されたことの画期性を指摘しました。そうした

被災地での資料収集活動の経緯や全体像をまとめ、当時そもそも「震災資料」として何を集めて残していくかについて試行錯誤したことなども話しました。実際に収集された「震災資料」は形態も内容も多様であり、それらをスライドで具体的に示すとともに、当センター所蔵資料を実際に手にしながら、その整理保存方法などについても説明。最後に、佐々木氏も参加しているボランティアグループ「震災・まちのアーカイブ」(長田区)の資料展を紹介し、「震災資料は未来に向けての郵便物のようなもの」と語りました。

震災15年という節目を迎えて、震災にあらためて向き合い、よりよい未来を築いていくために、震災資料の持つ意義や今後の課題について理解を深めることができる講演会となりました。



牛と災害復興

—牛から読み解く時代と社会—



震災資料専門員 板垣貴志

私の専門は日本史です。しかし、研究テーマはなんと“牛”なんです。残念ながら牛の歴史を研究しているなんていうと、「牛に歴史なんかあるの?」と問われるか、「道楽で研究しているの?」と不思議がられるのが落ちです。それでも私は、牛にこだわり愚直に研究生活を送ってきたわけです。歴史研究には、時代と社会を深部から捉えることが要求されます。いくら真面目に取り組んだとしても、研究テーマが些末なものならば、時代と社会の深部には到達できません。正直、私自身、牛の歴史を学問として研究する意味があるのだろうか悩んでいた時期もあったのです。そんな私の迷いを一気に払拭したのが、島根県に残されていた寛政期(1789~1801)の古文書(「大原郡六ヶ村難村二付おおはらぐんろっかそんなんそん に つ き はいくおお せ づらたきひおしゅう せんぜつしよキ拝借被仰付度旨愁訴演説書」)との出会いでした。

これは松江藩による公助の記録です。記録によれば、水害を被った大原郡の6つの村に松江藩が牛購入資金を貸し与えています。なぜ災害復興の公助に牛が選ばれているのだろうか。たんなる松江藩の愚策なのか。私もはじめは不思議でした。当時の松江藩の復興資金が潤沢であったとは到底考えられず、藩の役人も、限られた復興資金のなかで優先順位を考え抜いたはず。その結果が、牛への公費投入だったのです。災害は時代や社会の深部をあぶり出します。もしかして災害復興に不可欠とされた牛は、この地域の時代と社会を読み解くキーワードなのではないか。そんな淡い期待が私のなかで沸き起こり、研究テーマに対する迷いは消し飛びました。では、なぜ牛なのか。松江藩の公助施策を歴史的に評価するためには、この地域における牛の歴史をひも解く必要があるでしょう。

松江藩をふくむ中国山地が牛産地として特化していくのは、江戸時代の中期頃といわれています。中国山地では、日本列島においてもっとも高度な牛生産が展開され、家畜品種改良の先駆的实践であった“蔓牛”^{つるうし}と呼ばれる血統牛が安永期(1772~81)からつくられていました。生物遺伝で有名なメンデルの法則が発表されたのが1865年です。つまり中国山地では、理論的世界の大発見より農民の実践が先行していたことになり、これは驚異的な事実といえます。まずは、その背景を説明する必要がありますでしょう。

牛は、当時の農民に農宝と呼ばれていたほど高価なもので、およそ10俵(600kg)と等価値でした。資金に余裕のない零細農民は、自分で牛を購入することができませんが、農業にどうしても必要なので飼わねばなりません。そのような事情から、中国山地では、資金に余裕のあるものから牛を借り上げる牛の預託慣行が存在しました。当然、牛は仔牛を生みます。生まれた仔牛を売り、その代金を貸主と折半する取り決めがあり、牛の預託慣行は広範におこなわれていました。つまり、生まれた仔牛の善し悪しは収入を大きく左右します。とくに零細農民にとっては、仔牛の良否が自分達の生活に関わる大問題であって、少しでも優良な親牛を求めています。それが“蔓牛”を生み出した原動力となったのです。

また、そもそも牛は、増繁殖する極めて特殊な動産であり、各国の言語もそれを表しています。英語のCapital[資本]の語源はCattle[牛]ですし、漢字の「畜」と「蓄」は同義語です。本来、家畜は“富”としての性格を持ちあわせており、「家畜」は、「家の蓄え」と言い換えることもできるでしょう。つまり、農民にしてみれば、牛は将来の収入が見込める存在であり、換金も容易で、借金の担保にすることもできたので、結果として中国山地では、農村金融として機能していたのです。

災害復興に際し、松江藩が牛に公費投入した理由がみえてきました。牛への資金投入は、破綻した農村金融への持続性のある支援策だったのです。松江藩の役人は、やみくもに牛の購入資金を貸し与えたのではなく、牛が農村金融を円滑にし、災害復興に大きく寄与することを見抜いていたといえるでしょう。また、それは零細農民への保護策でもありました。最小の支援で最大の効果を上げるもの、それがまさに牛だったのです。

いうまでもなく、災害復興のための被災地域への支援は、有意義なものでなければならぬと思います。時代や地域・社会が異なれば、自ずと求められるものも異なるのでしょう。被災地域の歴史性や慣習を考慮して支援しなければ効果が挙がらないかも知れません。

くつかえしになりますが、災害は時代や社会の深部をあぶり出します。災害復興の歴史は示唆に富んでいて、多くのことを学ぶことができるように思います。

人と防災未来センター

2009年 10大ニュース

センターで1.17震災関連イベント 【1月】

震災14周年となる年1月17日を中心に、災害メモリアルKOBÉ、1.17防災未来賞（ぼうさい甲子園）、減災シンポジウムなど、さまざまな関連イベントが開催された。

障がい者やユニバーサルデザインに 関するさまざまな取り組み【6月～】

第3回DRI防災セミナー（6月）は災害弱者問題を、さらに第8回のセミナー（11月）は防災対策のユニバーサルデザインをテーマに開催。また、企画展として、「UDぼうさいプロジェクト ユニバーサル防災宣言!」（11/3～1/11）を開催。

リニューアル準備の開始 【3月】

「ひと未来館」を閉館し、新たに「防災未来館」との一体的な防災展示および研修用グローバルトレーニングサイトを設置し、2010（平成22）年1月にリニューアルオープンを予定。

国内外で続発する災害への対応 【8、9月】

駿河湾を震源とする地震、台風9号による災害をはじめ、台湾88水害、スマトラ島西部地震災害、サモア諸島沖地震津波による災害等に対し、現地調査を実施。

DRI防災セミナー開始 【4月】

人と防災未来センターの研究成果を広く発信するため、2010（平成22）年1月の震災15周年に向けて、4月から12月まで連続して9回のセミナーを開催。

次世代語り部シンポジウム 【8月】

震災15周年を迎え、当時は子どもだった若者たちがさまざまな世代や地域に向けて震災を語る「ユース震災語り部」の活動など、次世代に震災を語り継ぐ方法を確立するため、若者たちの語りの意義や今後の展開などについて、世代を超えて語り合った。

トップフォーラム全国展開 【5月～】

知事、市長など、自治体トップを対象とした防災研修である「トップフォーラム」を、香川県、三重県、埼玉県、熊本県、和歌山県で実施。

震災資料の活用 【8月～12月】

「描かれた1.17 震災絵画展2009」や「神戸大学附属図書館との合同資料展資料が語る阪神・淡路大震災の記憶と現在」などの資料展を開催。

新型インフルエンザ対応 【5月～】

新型インフルエンザの発生事案に対応するため、センターにおいて感染防止対策や、「防災未来サマーキャンペーン」を実施。

河田センター長、中林上級研究員が 平成21年度防災功労者表彰を受賞 【9月】

これまでの防災・減災分野における多大な功績により、河田恵昭センター長が防災功労者内閣総理大臣表彰を、中林一樹上級研究員が同防災担当大臣表彰をそれぞれ受賞した。

2010年1月 人と防災未来センター東館(旧ひと未来館)再オープン

「水と減災について学ぶフロア」誕生!!

いっどこで災害に遭っても命と財産を失わない「減災」社会を築いていくためには、すべての災害から生き抜くという視点から、地震や津波にとどまらず風水害についても学び、地球温暖化などによる環境激変に対応した減災への取り組みを考えることが大切です。

このため、人と防災未来センターでは、この度、旧ひと未来館3階において防災関連展示の充実を図るなどの改修を行い再オープンしました。

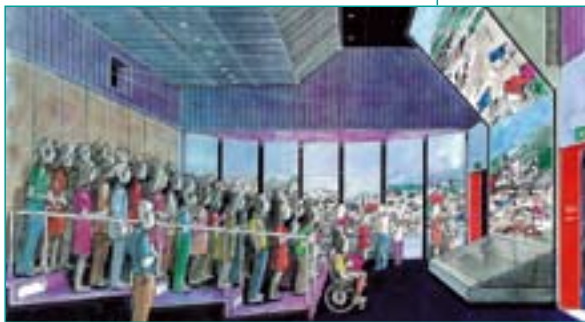
この「水と減災について学ぶフロア」では、特に世界とわが国で多発・激化している風水害にどのように対処すればよいのか、グローバルな観点から自然の水がもたらす恵みや、国内外の洪水、高潮、台風、集中豪雨等への理解を深め、それへの備えについて学ぶことができます。



いのちの星の奇跡

最初のコーナー「いのちの星の奇跡」では、さまざまな動物や植物をはぐくむ奇跡の星、宇宙に浮かぶ水の惑星“地球”について、白フクロウが語り掛けます。

水がもたらす美しい情景とそこに息づく人々の営みを紹介する「水辺のギャラリー」を通り抜けると、そこはブナ林に囲まれた「水の星の賛歌」。私たちのくらしが豊かな水と自然の恵みに支えられていること、それ故に災害の脅威と隣り合わせであることを伝えます。



風水害の脅威

次のコーナー「風水害の脅威」では、上下2段の大型スクリーンに、国内外で発生した台風、ハリケーン、洪水等の実写映像が次々に映し出され、風水害の脅威を体感できます。

市民や国際防災機関の取り組みを紹介する「市民ギャラリー」、しあわせ運べるように」のBGMが静かに流れる「あしたへ向かって」では、あらためて防災・減災への取り組みについて想いを巡らせてみましょう。小・中学生、高校生、大学生による防災・減災への取り組み事例や防災学検定なども紹介しています。

マルチハザード対応型防災学習施設として一層充実した人と防災未来センターに、皆さまお誘い合わせのうえ、お越してください。



あしたへ向かって

(なお、再オープンに合わせ、「防災未来館」を「西館」、「ひと未来館」を「東館」と名称変更いたしました。また、同日、本格中華料理の店「チャイニーズレストラン新上海」がオープンいたしましたので、ぜひご利用ください。)

財ひょうご震災記念21世紀研究機構

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

観覧案内・予約／TEL 078-262-5050 <http://www.dri.ne.jp/>

開館時間 9時30分～17時30分(入館は16時30分まで)
※7月～9月は9時30分～18時(入館は17時まで)
※金曜、土曜は9時30分～19時(入館は18時まで)

入館料金

大人	高校・大学生	小・中学生
600円(480円)	450円(360円)	無料

※()は20人以上の団体料金

※障害者、兵庫県内在住の65歳以上の高齢者は上記の半額

休館日

毎週月曜(月曜が祝日の場合は翌平日)、12月31日と1月1日

※ゴールデンウィーク期間中(4月28日から5月5日まで)は無休

交通

鉄道

- ・阪神電鉄「岩屋」駅、「春日野道」駅から徒歩約10分
- ・JR「灘」駅南口から徒歩12分
- ・阪急電鉄「王子公園」駅西口から徒歩約20分

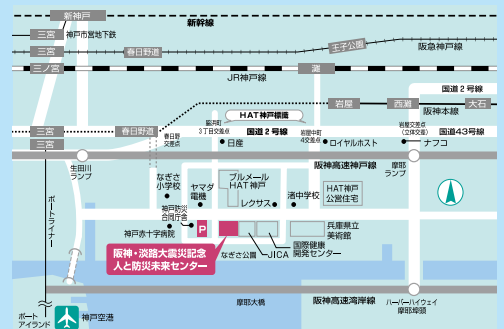
バス

- ・三宮駅から約15分

車

- ・阪神高速道路神戸線「生田川」ランプから約8分
- ・阪神高速道路神戸線「摩耶」ランプから約4分
- ・阪急・阪神・JR「三宮」駅から約10分

- 有料駐車場(普通車100台)
- バス待機所(予約制／無料)あり



兵庫県こころのケアセンター

平成21年度兵庫県音楽療法士認定証交付式・記念講演会・実践活動発表会 参加者募集

- ▶日時＝3月17日(水)13時～16時
 - ▶場所＝兵庫県こころのケアセンター
 - ▶プログラム
 - ・兵庫県音楽療法士認定証交付式
 - ・記念講演(講演者 名古屋音楽大学教授 栗林文雄氏)
 - ・実践活動発表会
 - ▶定員＝250名(先着順)入場無料
 - ▶主催＝兵庫県、財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構
 - ▶申し込み開始＝2月5日(金)
 - ▶申し込み方法＝所定の参加申込書(※)に必要事項を記入の上、郵送、FAXまたはEメールで下記へ。
- ※兵庫県こころのケアセンターのホームページからプリントアウトできます。



平成20年度認定証交付式

- 申し込み・問い合わせ先
兵庫県こころのケアセンター事業部事業課
〒651-0073神戸市中央区脇浜海岸通1-3-2
TEL 078-200-3010 FAX 078-200-3017
Eメール college2@dri.ne.jp



Hem21NEWS vol.19

平成22年1月発行



(財)ひょうご震災記念 21世紀研究機構

〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
(人と防災未来センター)
<http://www.hemri21.jp/>

当機構は、以下の組織で構成しています。

●管理部
TEL 078-262-5580
FAX 078-262-5587

●研究調査本部
TEL 078-262-5570
FAX 078-262-5593

●人と防災未来センター
TEL 078-262-5050
FAX 078-262-5055

●学術交流センター
TEL 078-262-5713
FAX 078-262-5122

●こころのケアセンター
〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通1-3-2
TEL 078-200-3010
FAX 078-200-3017

ニュースレターに関するご意見・ご感想を機構までお寄せください

学術交流センター

研究情報誌「21世紀ひょうご」 第7号発行のお知らせ

現代社会の課題を的確にとらえ、専門的立場から課題を分析・紹介し、具体的な提案を行う情報誌です。B5判約90ページ。

■特集「再生可能エネルギー」

- ・再生可能エネルギー～地球規模の視点から
(兵庫県立大学副学長 (財)地球環境戦略研究機関 関西研究センター所長 鈴木 胖)
- ・自然エネルギー革命から取り残される日本―新政権のもとで日本の自然エネルギー政策は再生できるか―
(「特非」環境エネルギー政策研究所所長 飯田哲也)
- ・太陽光発電による低炭素社会の実現
(「独」産業技術総合研究所太陽光発電研究センター長 近藤道雄)
- ・再生可能エネルギーとしてのバイオマスの利活用
(「財」新産業創造研究機構研究三部長 大隅 修)

■トピックス

- ・アジア太平洋フォーラム・淡路会議「国際シンポジウム」(記念講演)
- ・多自然居住地域の集落における安全安心の実現方策―兵庫県但馬・西播磨・丹波地域を対象として―

■調査報告

- ・駿河湾を震源とする地震に関する現地調査報告
- ・台風第9号による災害に関する現地調査報告



- ▶発行＝年2回
- ▶購読料＝800円(送料別途)
- ※定期購読をされる場合は、年間購読料1,600円(送料込み)
- 申し込み・問い合わせ＝学術交流センター
TEL 078-262-5713 FAX 078-262-5122
Eメール gakujuutsu@dri.ne.jp

コラボレーション・プロジェクトの 企画募集!

地産地消や地域通貨、まちづくりといった地域課題について、行政、NPO、地域などさまざまな人々とのコラボレーションによるプロジェクト(セミナー等)を企画してみませんか。上限10万円まで使用いただけます。

- ▶テーマ＝地域に密着した課題、行政施策に関する課題等で、新しい時代を切り開くテーマとしてふさわしいもの

- ▶企画者＝①代表者を含む構成員の過半数が学会員である10人未満のグループ、または、②代表者を含む構成員の5人以上が学会員である10人以上のグループ



- ▶主な開催スタイル＝セミナー、パネルディスカッション、ワークショップ
- 問い合わせ＝兵庫自治学会事務局
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
財ひょうご震災記念21世紀研究機構・学術交流センター内
TEL 078-262-5713・5714 FAX 078-262-5122
Eメール gakujuutsu@dri.ne.jp
<http://hapsea.net/index.html>

企画・デザイン・編集・制作・新聞印刷・商業印刷・出版印刷・新聞広告・雑誌広告・SP・イベント・IT事業



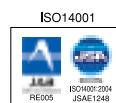
小説、自伝、詩集など
あなたが書きになった原稿を
ご予算に応じた自費出版プランで
ご提案いたします。
また、各企業の記念誌等の
企画・プロデュースも
いたしております。
どうぞお気軽にご相談ください。

ホームページでは
作成までの流れや
概算見積も
ご覧いただけます

株式会社 神戸新聞総合印刷

☎078-362-7180

本社/〒650-0044 神戸市中央区東川崎町1-5-7
<http://www.kobenp-printing.co.jp/>



印刷物の企画プロデュースから編集・印刷まで、ニーズに合わせてトータルに手がけます。